主図版

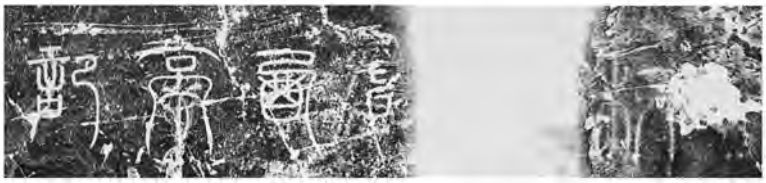
勵精於政事
仰勵之
訓閤
丹
務
重
侯
不
之
真
卿
令
舊
令
北
台
府
頭
詔
在
清
之
孝
也
曾
臣
訓
有
所
歸
雖
無
曾
臣
訓
之
時
之
水
達
之
功
乃
餘
刃
也
夫
知
己

「顔真卿の書」⑩
「西亭記残碑」
唐・大歷十二年（777年）

碑側　　碑陽

碑側　　碑陰

柳文　暢西亭記



今年の9月に浙江大学の「芸術考古博物館」で初めて一般公開された、新出土の顔真卿筆の刻石である。これまでの顔真卿の書作資料に未見の作品である。浙江省の湖州の工事現場から出土したと伝えられている。個人の収集所蔵であったが、浙江大学の博物館の開館準備にあわせて寄贈され、博物館の重宝として展示されている。中国の友人からもこの碑の公開のニュースが、多く寄せられた。「顔真卿の書」シリーズの最後に相応しい話題と思い、取り上げた。碑の名称は、「梁呉興太守柳惲西亭記」である。碑が破損していることから、残碑の語を付している。六世紀南朝・梁代の呉興太守であった柳惲という人物が風光明媚な湖州の白蘋洲を詩に詠んだ名勝にあったとされる西亭等を整備したことに因んで建てられた碑とされる。顔真卿が湖州の太守の役人として赴任していた大暦十二年(777)、69歳の頃である。故に、碑名は、単に「西亭記」「西亭記残碑」などと称される。碑は上部のみ残り、二つ塊が、復元するように繋がれて展示されている。五、六文字ほどの残石も付されている。碑文は、碑陽、碑側、碑陰の四面に刻されている(図②)。碑陽は、「湖州烏程県令…」で始まり、その横に顔真卿の撰文であることを示す「卿撰併書」の文字が見られる。また碑陰の上部には、篆書で「柳文暢西亭記」の文字が、横書きに刻されている(図③)。右の主図版は、比較的字画が鮮明な碑陰を示した。まさに顔法である。次回は、この碑の書風に目を向けてみよう。

伊藤滋（書斎名・木鶏室）

写真資料提供・梁延亮氏

書道芸術院
令和の群像（2019）

第62回毎日書道展　　末岡紅尅書

末岡紅尅

『成長は常に苦悩を伴う』

習い事といえば読み、書き、算盤の時代。父から「女性もこれからは手に職を持たなければ」と勧められ、奈良学芸大学、高校教員養成課程書道科に入学。ここで初めてかなを習う。集中講義で田中塊堂先生に。美しい線と自然な流れに魅せられ、卒業後も山口から大阪へ月一で通った。先生の日本芸術院賞受賞と、父の死であまり長くは続かなかった。その後、毎日展かな部、初出品初入選したのをきっかけに山田魯江先生に入門。先生の師、加藤翠柳先生もかなに精通されていることもあって、線については、ある程度認められた。ここでは又、初めての試みである現代詩文書との出会い。古典を基に漢字、かなの融合。しかも濃墨、長鋒羊毛。慣れるまでは苦悩の連続。月例作品、展覧会作品と息つく間もなく、毎日筆を持っている状態。ただ展覧会に出品の都度、一門で修学旅行のように、夜行で上京。これが唯一心和む事だった。勤めていなかった事も幸いし、みっちりの5年間。今あるのは魯江先生の指導の下、凝縮した時期があったから。私の黄金時代でもある。主人の転勤や育児で先生の下を離れたものの、書道芸術院展には連続自主出品。いつも雰囲気が独りよがりになることに気づき、作品集を貪り、講習会にも参加を心掛けた。その内淡墨に惹かれ、10数年が経過。写真の作品は、初期の頃のもの。字が小さいので、あまり色は解らないものの、毎回墨色から詩の雰囲気を表現しつつ構成に苦慮している。化学的根拠が解らないまま、出たとこ勝負の墨色。この過程が成長の証となることを望んで止まない。

書のひろば

理事長　辻 元 大 雲

第22回書道芸術院　国際交流ウィーン書道展「日本オーストリア友好150周年事業」に認定される

本年10月21日～25日、オーストリア・ウィーン市にて開催される本院主催ウィーン展がこのほど、オーストリア日本大使館の計らいで「日本オーストリア友好150周年事業」として認定されることになった。日本大使館は共催として主体的にご協力くださることになった。これまでと同様であるが記念事業に認定されたことの意味は大きい。深く感謝申し上げたい。

今回展の出品者は展示会場の制約で財団理事・監事20名のほか、訪問団に参加くださる予定の本院審査会員6名もあわせてご出品いただくことになっており、計26点を展示する。ワークショップは市民・児童対象に計3回開催する。

会期中に隣国スロバキア・プラチスラバ(首都)、トルナバにてもワークショップ、作品紹介なども行う予定である。(次号にて詳細報告予定)

創立記念日特別講演会　荒船清彦氏を講師として開催

11月23日(土)恒例の本院創立記念日特別講演会が開催される。会員諸氏はもとより一般参加も受け付ける。

会場　上野精養軒

日時　11月23日午後2時開会

講師　荒船清彦氏

外務省官房審議官、ロサンジェルス総領事、ニカラグア特命全権大使、外務省中南米局長、アルゼンティン・スペイン特命全権大使などを歴任。

前全国書美術振興会会長・日本書道ユネスコ登録推進協議会会長、前書写書道教育推進協議会会長等を務められている。海外での豊富なご経験や書に関する造詣も深い方である。

講演会参加申込は事務局まで。早めに申し込みを。(先着200名まで)

当日講演会終了後創立を記念して懇親会を荒船先生をお招きして開催する。会費無料（来賓及び本院会員に限定）

第173回全日本書道連盟理事会

9月5日(木)上野精養軒にて全日本書道連盟理事会が開催された。

・議事

1　書写書道教育推進協議会活動報告

2　日本書道ユネスコ登録推進協議会活動報告

3　日本の自然と書の心「日本の書200人選～東京2020大会の開催を記念して～」開催について（前号既報）

4　書道夏期書道大学講座報告

8月2日～4日池袋サンシャインシティにて開催。延べ306名受講。

5　書道講演会について

・期日　11月18日(月) 14時～

・会場　国立新美術館3F講堂

・講師　周防正行氏（映画監督）

・演題　「語りの魅力＝映画『カツベン！』公開前」

・参加希望は連盟事務所まで

TEL 03 - 5294 - 1371

Fax 03 - 5294 - 1372

・令和元年度助け合い募金について

・助成申請　全書研等2件を承認

全国書美術振興会理事会

9月3日公益財団法人全国書美術振興会理事会が開催され、経過報告と共に本年度事業計画、予算案、第47回展開催報告、第48回展の開催計画などが審議された。

第48回展はほぼ前回展と同様に関西展・中部展・東京展・九州展のほか全国7会場にて巡回展が開催される。また消費税の上昇により出品協賛費が若干値上げされる。東京展での公募臨書展は2000円据え置きとなった。

その他ユネスコ登録運動、書写書道教育推進協議会なども報告された。

任期満了に伴う評議員の改選案も検討され12月2日の評議員会にて決定する。

第71回毎日書道展東北仙台展

9月13日～18日まで仙台メディアテークにて開催された毎日東北仙台展は本院理事坂本素雪実行委員長の指揮のもと、盛大に開催された。開催初日に担当理事として辻元大雲が出席、開幕式の後作品解説および席上揮毫を行った。昨年書の甲子園「国際高校生選抜書展」で初の全国優勝の快挙を挙げた仙台育英高校の生徒も参加していただき、盛況であった。

毎日書道展の地方展には毎日書道会理事監事が担当として開幕式や祝賀会などに参加、作品解説や席上揮毫等を行っている。是非ご高覧を。今後九州展、北海道展、おおとりは東海展で11月6日～11日まで、愛知県美術館にて。6日の開幕式に大雲参列予定。

第7回毎日書道群馬展開催

9月20日～25日群馬県高崎シティギャラリーにて開催され、毎日書道展で活躍する群馬県在住の審査会員、会員を中心として開催。広々とした会場に展示された作品は、充実多彩であった。

書の甲子園で入賞した高校生の作品も参考展示され、将来を見越した好企画展であった。本院関係者が多く、下谷洋子常務理事、金井如水理事など有力作家が犇めいている。更なる発展飛躍を期待したい。

台風15号千葉県などを直撃、本院関係者多数被災。お見舞い申し上げます。早めの復旧復興を。

現代詩文書 (一)

高田幽玄

現代詩文書とは

今月号から6回にわたってこの項を担当することになりました。

さて、現代詩文書という名称は書道芸術院での呼び方で、毎日書道展では近代詩文書と言い、日展では調和体、高等学校芸術科書道では漢字仮名交じり書と呼んでいます。

第71回毎日書道展　　高田幽玄書

現代の書は、大正期、比田井天来、中村不折、川谷尚亭、吉田苞竹らが古典研究を重視、それによって学問的にも技術的にも深化させていきました。

昭和八年、天来門下の金子鷗亭が〈新調和体論〉を発表しましたが、本格的にその運動が盛んになったのは戦後間もなく始まった毎日書道展においてでした。

昭和20年の敗戦は日本人の価値観を根底から覆らせました。書道界でも従来の漢字仮名ではなく、素材を現代的精神に裏付けられた現代詩文に求めました。漢字に仮名を調和させ、会場芸術として、あるいは生活の中に溶け込み親しみの持てる書を目指しました。その呼び方はいろいろですが、現代人の思想心情生活感情を書として表現し、しかも書としての格調を保ったものこそ、現代の芸術書道と言えると主張しました。

その理念はともかく、現実にそれが具体的に実現するまで、金子鷗亭はじめ多くの先達の血の滲むような努力がありました。種谷扇舟も当初から参画した重要な一人でした。毎日書道展も12回になってようやく「近代詩文書」という部門が確立されたのです。

21世紀の書
―私の主張―

かな (一)

須田清子

かな表現の摩訶不思議な魅力

私が以前書道芸術院展で院賞を頂いたのは前衛作品だった。下谷洋子先生の寛大なご配慮により、私は書泉会に所属しながら、前衛を自由に書いていた。書いていたと言うより勝手に描いていたのだ。それだけに、しなやかながら存在感の有るかな作品に対して、強い羨望があった。かな文字の理論や歴史的な変遷は別に記させてもらうとして、漢字や他の表現方法を少しだけかじった自分としては、今はかなでの表現が一番難しく又日本人としての自分の琴線に触れる世界ではないかと思っている。

ある書物に、「新たに作品を創作すると言う事は、古き良き作品をとことん真似し、少しだけその中に今の自分の気持ちや感覚を入れこむ」と言う文章があった。古典の作品を学び、平安時代の雅の雰囲気を察し、つまり古典を臨書し、その臨書した作品の趣や香りを、文字で紙面に表現出来たらと常々思っている。しかしこれが又何とも深遠な世界であるし、学び尽きる事の無い難しい世界である。色々な知識や自分自身の人間性を高め、今の自分のかな作品に少しでも織り込めたらと願って学んでいる。又それを目標として良き指導者の下で、励んでいるさなかです。

第61回書道芸術院展「春の日は」　須田清子書

第55回　書道芸術院単位認定講習会

会場＝群馬県渋川市伊香保町（ホテル天坊）
会期＝令和元年8月24日(土)～25日(日)
主管＝北関東総局（総局長　金井如水）

群馬県には、地域に根づいた上毛カルタというものが有り、「い」は「伊香保温泉日本の名湯」、「む」は「昔を語る多胡の古碑」があります。

その温泉地、ホテル天坊で第55回書道芸術院単位認定講習会が13年ぶりに開催されました。

講習会には遠く南は福岡から、北は青森まで全国各地より大勢の仲間に集まって頂き、8月24、25日の二日間にわたり開催されました。

前日の23日には、世界の記憶遺産の上野三碑の一つ多胡碑の見学に39名の方々が参加され、研修会を行いました。

単位認定講習会は、二日間で単位取得のための8科目の講義がありました。

受講者数は123名、役員、講師、助講師とスタッフを入れると200名余の参加となりました。

開講式理事長あいさつ

8月24日の開講式は、主催者として辻元大雲理事長の挨拶、下谷洋子常務理事より激励の言葉をいただき、講習会は始まりました。早速第1時間目の篆刻の授業が始まり、会場は受講者の熱気に包まれておりました。

篆刻

講　師＝佐藤香山先生
助講師＝野登蒼山先生
助講師＝大沼樵峰先生

「鮇」白文を彫る」と題して

佐藤先生より、堅い石に「鮇」を書いてからでは時間がありませんので、先に佐藤先生が字入れをして下さった石を用意していただきました。

次に「刀」の使い方について、説明を聞き、彫り始めましたが、中には、「印刀」でなく彫刻刀であったり、木を彫る刀であったりして、なかなか上

篆刻　指導中の佐藤香山先生

手に彫れない等、時間が短く苦戦をしていたようです。

原拓書道史

講　師＝種谷萬城先生
助講師＝三浦鄭街先生

「山東省の書道遺跡」と題して

大広間に拓本を広げ、スクリーンを使用しての細かな説明をしていただいた。さらに拓本一点ずつ内容の説明をしていただき、受講者の中には、現地に行って見たいと言う人もいて、原拓から受けた文字の世界の偉大さを感じていたようでした。

現代詩文書

講　師＝浜田堂光先生
助講師＝佐藤無極先生

「俳句を書く（古典をもとに）」と題して

特に、平かなと片かなの文字の成り立ちと漢字の調和（融合性）について、また古典の学習を重視した作品作りに挑戦をして欲しいと話されました。

受講者は、一つも聞き洩らさないように真剣に取り組んでいました。

原拓書道史　解説中の種谷萬城先生

現代詩文書　参考揮毫中の浜田堂光先生

かな

講　師＝平川峰子先生
助講師＝小島孝予先生

「関戸本古今集拡大臨書」と題して

かなが日本でどのように発展してきたか、その表現は多様な歴史を経てきている。などの説明がありました。そして、かなの用具用材について、特に墨は日本製が良いとの話でした。

実技に入り、受講者は手慣れているようで、一生懸命取り組んでいました。

書　写

講　師＝廣瀬舟雲先生
助講師＝片岡豪峰先生

「書写教育の最新傾向」と題して

沢山の資料を用意して頂きスムーズに勉強が出来るのか心配でしたが、先生のスピーチのテンポの良さに一つでも漏らさないように受講していました。

特に、これから始まる小学生の水書き書道について熱心に指導して下さり、時間が足りなかったようでした。

かな　指導中の平川峰子先生

書写　講義中の広瀬舟雲先生

この講習会資料を大切に勉強して欲しいと思います。

漢　字

講　師＝小林琴水先生
助講師＝前田龍雲先生

「祭姪文稿より創作へ」と題して

「顔真卿の家族、生い立ちと書風の流れ、また革新派として書に新風を吹かせたこと、特に篆書の用筆法を学び楷書、行書に取り入れた字形、線の重み、強さの表現を重視しており、それが新鮮で奇抜な書風を確立している」と解説がありました。

臨書するには、よく釈文を見ながら書いて欲しい、特に起筆の筆を動かす時は、筆先が線の中心を通るようにし筆管を持ち、極端な側筆にならないようにと教えられました。

漢字　揮毫中の小林琴水先生

懇親会

24日の懇親会では毎日書道会西村修一専務理事の挨拶をいただきました。アトラクションとして、「群馬交響楽団」による弦楽四重奏のすばらしい演奏を楽しみました。音楽の魅力を十分堪能され、明日の力になったのではと思います。

前衛書

講　師＝板垣洞仙先生
助講師＝宮﨑芳玉先生

「前衛書を書いてみよう」と題して

前衛書は、難しい書ではない。表現方法も自由であって良い。素材を選び、構成、墨色、そして線質等を考えて書き、さらに、全体の流れも考えて見たり書いたりすることが大切です。

始めに板垣先生が模範揮毫し、続いて、宮﨑先生が重いどっしりした作品を揮毫されました。受講者は、驚いたような顔をして見て席に戻り一人一人課題に向かって作品制作に頑張っておりました。

揮毫中の板垣洞仙先生

院　史

講　師＝辻元大雲先生
助講師＝片岡豪峰先生

「書道芸術院の歴史と最近の院の活動」と題して

講習会最後の講義です。創立が昭和22年11月23日で、毎年創立記念行事を行っている事、創立からの発起人や代表者の人達のこと、そして事業として各展覧会の開催、全国に13の総支局の組織が有り、各組織の中でそれぞれ活動をしている事等話されました。又、

院史　講義中の辻元大雲先生

海外展のことについて細かくお話をされ、日本の書道団体でも海外展を行っている所は少ないと話され、受講者全員ほこらしげに聞いておりました。

閉講式は、辻元大雲理事長の主催者挨拶があり、単位認定証授与では、今回初めて受講された、かな部の髙山裕子さんが代表して辻元理事長より授与されました。

次に、理事長から講評をいただき、謝辞を青森から出席された前衛書部審査会員候補の工藤山房さんが代表して述べられました。

そして、後藤大峰常務理事が終了の挨拶の後、次の開催地岡山の大平邑峰山陽支局長の紹介をし、金井北関東総局長と握手を交わして引き継ぎを行いました。講師の先生方、出席された皆様方のご協力のもと講習会が無事に予定どおり終了することが出来ました。

結びに、勉強したことを実践に生かして新しい作品作りや日常の書道に役立てて頂ければと願っています。講師・助講師の先生方には大変お世話になりました。有難うございました。

懇親会

アトラクション「群馬交響楽団」による弦楽四重奏

毎日書道会　西村修一専務理事あいさつ

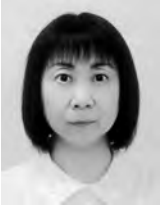
単位認定証授与　髙山裕子さん

次年度担当　山陽支局へバトンタッチ

受講生代表謝辞　工藤山房さん

令和元年度 新審査会員作品

臼井 真理（現）・若見 苑柚（現）・伊藤 有津（前）・高原 梨秀（前）



臼井 真理
（宮城）

「子規の句」

審査会員にご推挙頂きありがとうございます。故小野寺逢仙先生、熊谷宗苑先生よりご指導あってのことと感じております。震災等何度か書く事が難しい時がありましたが、宗苑先生に温かい励ましご指導を頂きました。書道芸術院、宮城野書人会の諸先生方のご厚情に深謝申し上げ一層精進致します。

（真理）

伊藤 有津
（宮城）

「令」

この度は、新審査会員にご推挙いただきありがとうございます。熱心にご指導下さる大町青蓮先生には、心より感謝申し上げます。

「令和」と共に自分もスタート。胸躍る思いを表現しました。今後も書友の皆さんと古典を学び、益々精進してまいります。

（有津）

◇

若見 苑柚
（宮城）

「風の曲線」

支え導いてくださった宮城野書人会の先生方、師の木須翠苑先生、書友の皆様との出会いに思いを馳せると、清々しさと共にこの詩文が浮かんできました。書を通じた人との出会いを今後も大切にしていきたいと思います。

この度の昇格に深く感謝し、精進を重ねて参ります。

（苑柚）

高原 梨秀
（青森）

「雨」

この度は審査会員にご推挙いただきありがとうございます。

作品は、漢字の「雨」を展開させ、空から落ちる雨粒をイメージして書きました。これからは自分らしさを大切に幅広い表現を追求していきたいと思います。

（梨秀）

※11月号も引き続き、新審査会員のご紹介をさせていただきます。

古典鑑賞 413

灌頂歴名（平安）空海 ①

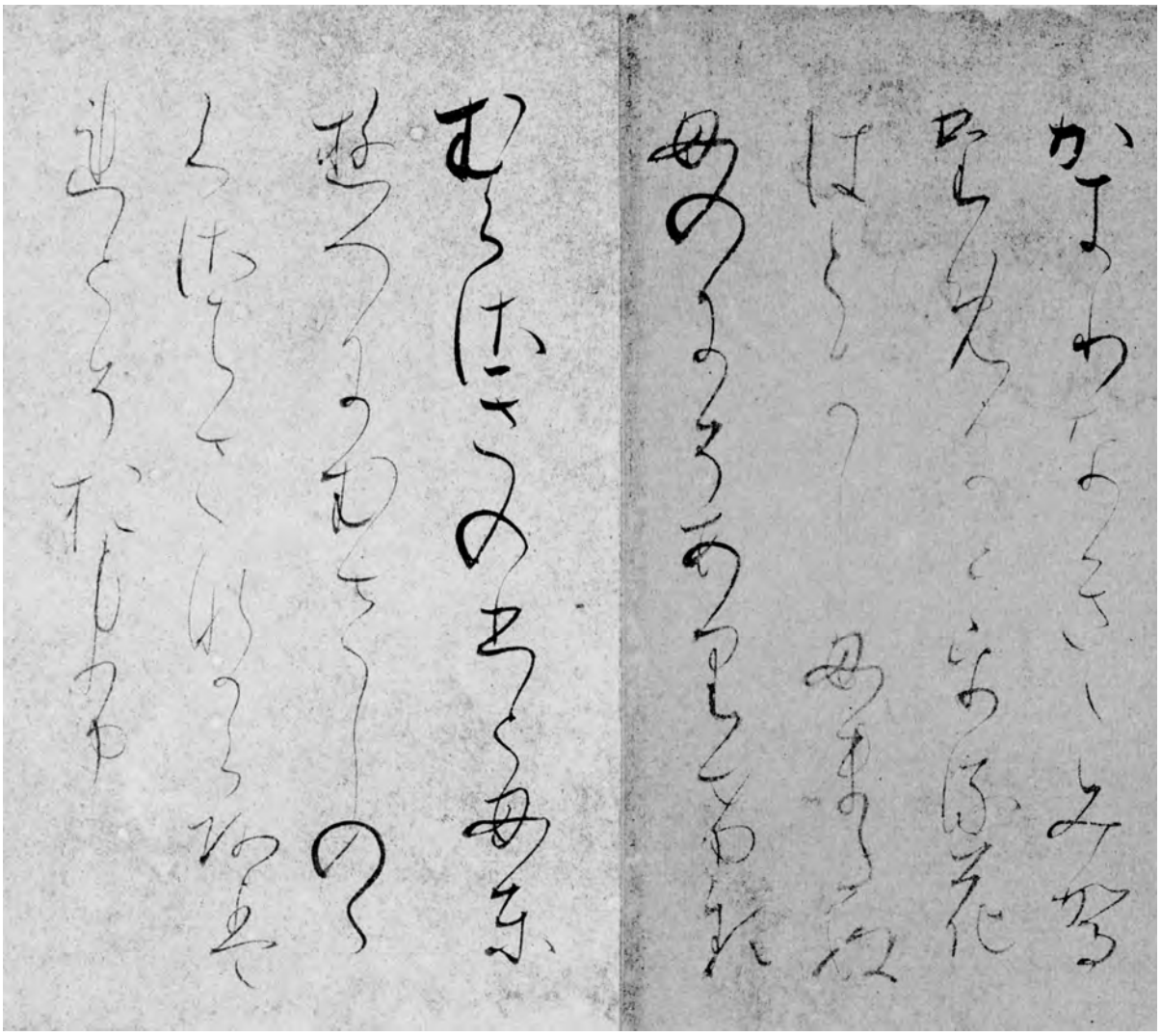
弘仁三年十二月十四日。於高雄山寺受胎蔵灌頂人々暦名。
都合一百卌五人（四十）之中、太僧廿二人、沙弥卅七人、近事卅一人、童子卅五人。
太僧衆数廿二人
一 僧最澄（興福寺 宝亀）
二 僧賢栄（元興寺 大白明）
四 泰法（般若）
五 忠栄（不空成就）

〈解説〉灌頂歴名の灌頂とは、頭から水を注ぐ密教儀式のことである。弘仁3年(812)11月と12月、翌年3月の3回にわたり、京都の高雄山寺（現在の神護寺）において弘法大師空海によってこれが執り行われた際に、その授者の名前を大師みずから書き留めておいた手控えとしての名簿が灌頂歴名である。授者名の下には、花を投じて縁を結んだ仏や菩薩の名が記されている。中に最澄をはじめ、遣唐使船に同乗した人々の名も見られることから、空海がともに学んだ人々との結びつきを知ることができる。国宝に指定されている。（編集部）

（神護寺蔵）　（掲載図版73％に縮小）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

漢字研究部臨書課題	＝（半紙普通判・縦使用）上記の法帖より何文字臨書してもよい。
特別研究部臨書課題	＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の上記掲載部分以外も可。



（個人蔵）

古筆鑑賞 187

曼殊院本古今和歌集（伝 藤原行成）①

〈よみ〉

かぎりなきゝみが
ためにとをる花
はときしもまたぬ
もの
むらさきのひともと
ゆへにむさしのゝ
くさはさながらあは
れとぞおもふ

〈解説〉 曼殊院本古今和歌集は、京都の曼殊院に伝来した『古今和歌集』巻第十七の零巻（巻子本のうち、内容の一部が失われ、部数のそろわないもの。また、その一部を残しているもの）である。巻頭に「古今和歌集巻十七、雑七十首」とあることから、もとは1巻全部を書写したことが明らかであるが、今日では31首が現存している。

料紙は、巻頭から順に藍・浅黄・薄茶・藍・薄藍・藍・浅黄の漉き染めの紙7枚を継いだ、縦14.2㎝・横286.0㎝の巻物である。古筆の中で最も小さい巻子本であるが、行書き（行頭の高さや行間をそろえて書く書き方）のためゆったりと見える。

この曼殊院本古今集は、優美でのびやかな書風ながら、力強いたくましい線が特徴である。

（編集部）

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

※掲載図版は原寸

特別研究部 臨書課題	（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）上記の掲載以外も可。

かな研究部 臨書課題	（半紙普通判（**料紙可**）・**縦長**に使用）別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。（全臨も可）**

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

漢字規定　初段以上【十一月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

千葉蒼玄選書

天地玄黄　よみ（天地玄黄）

書体＝自由

習い方解説（一）

千葉蒼玄

天地玄黄（天地玄黄）　（千字文）

千字文は、南朝・梁（502－549）の武帝が、周興嗣に文章を作らせたと伝えられる。命を受けて一夜で千字文を考えたが、進上したときには白髪になっていたという。今回より6回、各書体で書いてみたいと思う。楷書は自分の勉強した基礎が出るようである。天は玄（黒く）地は黄色、まさに四文字二百五十句の最初として雄大な言葉である。参考に篆書を載せた。

〈参考作品〉

漢字規定 秀級以下【十一月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

坂本素雪選書

雅人深致 よみ（雅人の深致）

書体＝楷書

習い方解説 (一)

坂本素雪

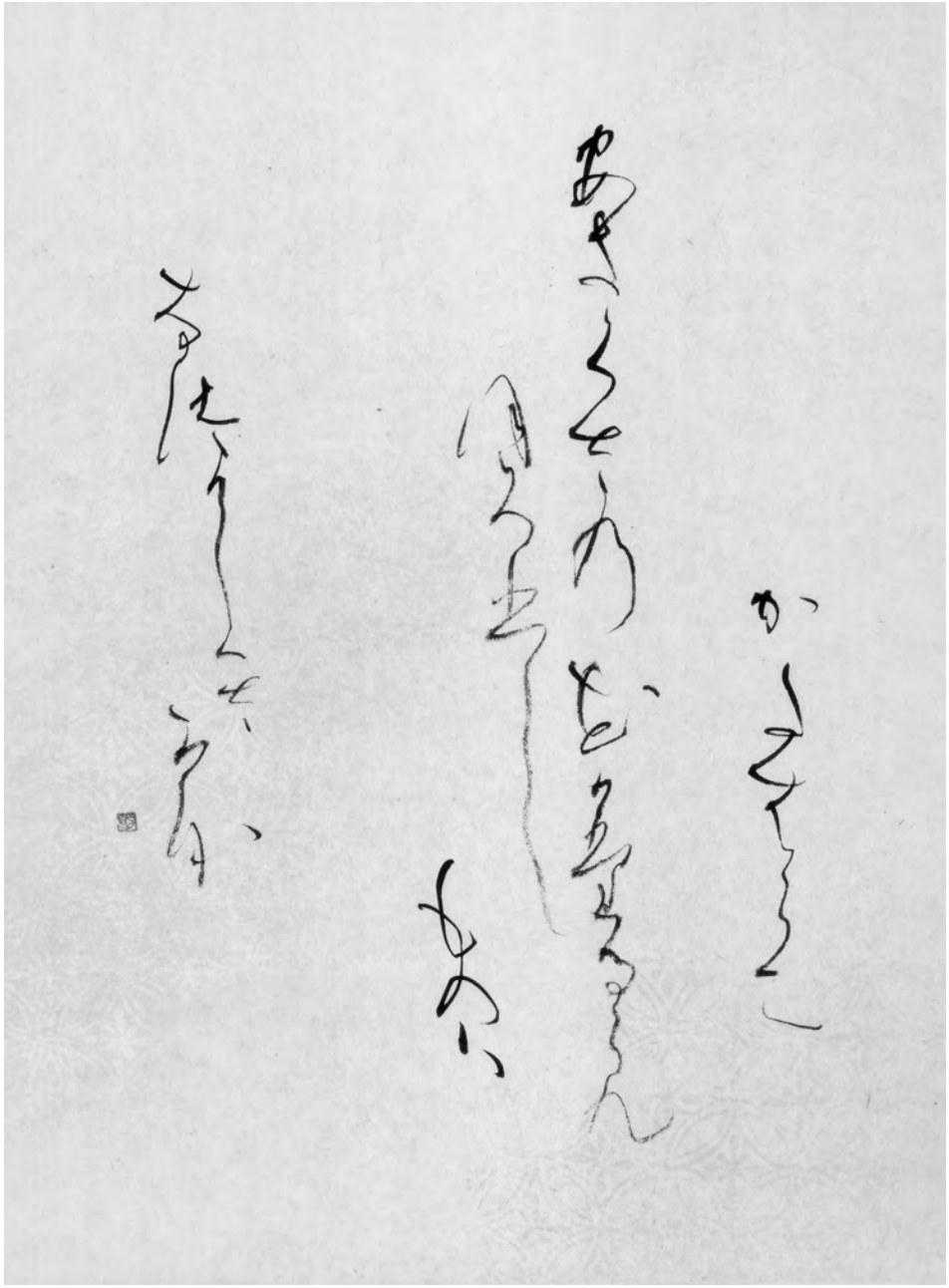
雅人深致
（雅人の深致）

今月から「楷書」を担当する事になりましたので宜しくお願い致します。よく何々の古典を参考にして書きましたと言いますが、あれは「倣書」に近い書き方です。今回は古典に類似した格調高い作風でなく、実用的な書風と言いますか均整のとれた「美しい字」を表現する事に心掛けてみました。しかし筆意や筆触はどうしても何らかの古典の影響を受け、身についているので作風として出てしまいます。できるだけ古典の匂いを漂わせないように普通に美しく。「人」＝画数が少ないので少し小さく太めに書くとバランスが取れます。

偏と旁の文字はバランスを見て下さい。大小を観察すれば見えてきます。

参考文献「草心」

かな規定　初段以上【十一月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）　鈴木せつ子選書



よみ方　かた(多)は(者)らに(一)秋(安支)く(久)さの(乃)花か(可)た(堂)るらく(九)
ほ(保)ろび(悲)しものは(八)な(奈)つ(徒)か(可)しきか(可)な(那)

創作

習い方解説（一）

鈴木　せつ子

かたはらに秋ぐさの花かたるらく
ほろびしものはなつかしきかな
（若山牧水）

路傍に嘆く秋草の花が語ることには「滅び去ったものは懐かしいなあ」の意、歌集「路上」より九月初めより十一月半ばまでいた信濃の国浅間山の麓にてよんだ歌

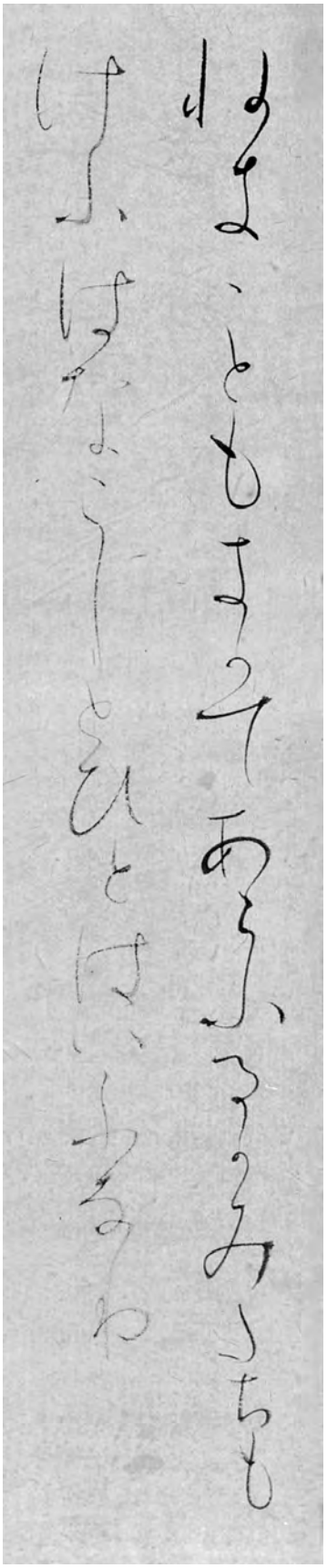
この歌は、しが2回出てきます。線の長短、筆圧の強弱や遅速、さらに次の字と字の関係によって変化していることに注意して下さい。

前号までに掲載された「本阿弥切」にも多くある5字連綿、4字連綿を今回取り入れてみました。連綿をするには単に姿を似せるということではなく、古筆から学んだ呼吸や間の取り方等を交えながら、自分のリズムが出せるまで反復して練習することが大切です。

かなは、左右対称ではなく、1行の重心が通り、行間がスッキリとし、自然な調和と変化に美しさがあるとされますが、理解するのはなかなか奥が深く難しいですね。

かな規定　秀級以下【十一月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿または単体を含む）を臨書する。



粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大120％）

よみ方　ねぎ(支)ごともき(支)か(可)であらぶるか(可)みた(多)ちも
けふはなごしとひとはいふな(奈)り(利)

かな条幅規定【十一月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

佐藤希雲選書

よみ方　神無月ふ(布)り(利)みふ(不)らず(春)み(三)さ(佐)だ(多)め(免)な(那)き
時雨ぞ(曽)冬のはじめなり(利)け(々)る

創作

習い方解説（一）

佐藤希雲

神無月ふりみふらずみさだめなき
時雨ぞ冬のはじめなりける
（後撰集・読人不知）

歌意は「10月に降ったり降らなかったり、不規則な時雨が冬の初めの景物なのだなあ」といったところです。

漢字3字の書き出しは難しいかもしれませんが工夫のしどころです。平凡な2行書きで淡々と運筆して、歌意と合わせてみました。参考にしてください。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【十一月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

辻元大雲選書

雲分暝色來天外　風卷湖聲落樹間
（雲は暝色を分かちて天外より来り　風は湖声を巻いて樹間に落つ）
（文徵明）

書体＝自由

漢字条幅規定　秀級以下【十一月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

崎井恵風選書

松竹含韻
（松竹韻を含む）
（劉禹錫詩）

書体＝自由

習い方解説（一）

辻元大雲

今回から6回担当します。5回目までは七言二句、14文字です。毎回ほぼ行草書表現を中心とし、半切二行形式の標準的な参考例としました。漢字条幅課題は書体自由です。楷行草篆隷、色々な書体、さらに書風の変化など多彩に取り組めます。意欲的に様々なスタイルに挑戦してみて下さい。

初回は平易な行書でまとめてみました。

※タテ形式に限る

習い方解説（一）

崎井恵風

今月より、半年間担当させていただきます。

今回は、「争座位稿」の重厚で、強仞な線を参考に表現しました。躍動感のある用筆にも気をつけて書いてください。

濃墨・短めの羊毛筆を使用

ペン字規定【十一月十五日締めきり】

山田梓江選書

「百人一首」とは百人の歌人の秀歌を一首ずつまとめたもの。小倉百人一首は藤原定家が撰んだものである。

梓江書

用紙＝はがきの大きさ（14.8×10㎝）、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説（一）

山田梓江

下谷洋子先生の「教則本・小倉百人一首」を拝見し、いつもの事ですが、美しいかなに魅了されています。

この度、ペン字手本の依頼があり、この機に小倉百人一首について書こうと思いました。しかし、紙面は限られたハガキ判なので、6ヶ月を通して書いても微々たることしか伝える事は出来ませんが、ペン字の練習をしながら歌人の世界を覗いてみて見て下さい。最近は本屋へ行けば楽しくなるような解説書が沢山並んでいます。足を運んでみては如何でしょうか？

今回は初心者を対象に基本の楷書で書きました。同じ文字が多数出てきますので、日頃、行草体に慣れている人はかえって難しいかも知れません。

上級者はいろいろ文字の形を変えて書かれても構いませんが、初心にかえって楷書の練習もしてみて下さい。

今月のホープ作品 各部総評 NO.700

かな部　師範　重村　恵月

淡いぼかしの料紙にほんのりと墨がのり、艶めいた線情が穏やかに続く。息を呑むような麗しい趣。

◎かな部総評　漢字とかなの調和に苦慮した様子。特に初めの旅が異常に大きな作品が目立った。墨量の工夫も鑑みてほしい。（洋子評）

漢字条幅部　師範　前浜　裕香

やや肉太な線質で行草単体表現は、率直明快なリズムを醸している。爽快さも感じる妙作である。

◎漢字条幅部総評　上級20字表現はやや煩瑣（はんさ）な感ある作多し。大小粗密の変化など工夫してほしい。下級も同様の感あり。（大雲評）

前衛書部　特選　本田　美雪

マグマ吹き出す予兆か、秘めた情熱を感じさせる作。思い切り右を空けた構成が新鮮さを表出。

◎前衛書部総評　今回は出品数も意欲作もやや少なかった。日頃からの草稿づくり大切。（京子評）

現代詩文書部　特選　小泉　潤

やや荒削りな面はあるが、落差のある運筆による鋭く強い響きのある線は魅力的である。

◎現代詩文書部総評　練度の高い作品が多く楽しめた。奇を衒い過ぎた作品もあり一考を。（邑峰評）

かな条幅部　師範　重村　恵月

控えめな字粒と墨量が絶妙で、行数の多さを感じさせない。漢字を単純なかなに置きかえて大成功。

◎かな条幅部総評　3行を試みるも煩雑のみに終わった作多く残念。美しい紙面を作る工夫を重んじて良い字形を選ぶ努力を！（明子評）

漢字部　師範　大槻　剛洞

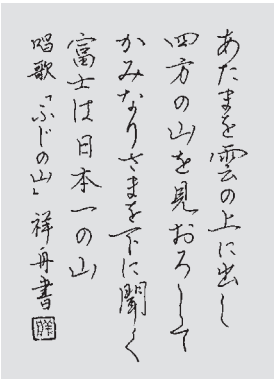
木簡風作品中の白眉である理由は散見する渇線によるスパイス。「用」が「美」となる要素の一つ。

◎漢字部総評　上級作品は、参考手本の用筆法解説に学んで隷書作が多かった。「猶」の旁に誤字が多く残念！（翠風評）

ペン字部　師範　波多　祥舟

ペン線を生かし切った重厚かつしなやかな筆致が魅力。雄大な「富士山」を想像させる格調高い作。

◎ペン字部総評　リズムよく書けている作品が多かった。ひらがなは、特に日頃から正しく整った字形を研鑽することが大事。（孝子評）



今月の

特別研究部優秀作品（特選）

選評　辻元大雲　山口仙草　半田藤扇　大辻多希子

漢字

（大拙社）畠中成山「五言二句」

畠中成山書

180×60㎝

◆堂々たる風格、重厚な線の中に響きを加えゆるぎなく表現する。インパクトのある作品に称賛す。（藤扇評）

◆気力充実の隷書2行書。やや粗い感のある渇筆が紙面に動きを与え、安定感ある隷書表現に変化を醸す。（大雲評）

◆弾力に富んだ強靭な筆線が堂々たる佇まいとなり、太い横画が作品の存在感を高めている。（多希子評）

◆力強い筆致の雄大な隷書表現。渇筆がきいて、見応えがあり新鮮味あふれる作品となった。（仙草評）

かな

（AI）藤村昌子「風立てば」

藤村昌子書

170×53㎝

◆4行に配置された、縦に流れる線と横に張る線が心地良い。明るく流麗な作品となった。（多希子評）

◆若草色の料紙に爽やかに歌2首を構成する。切れ味よい運筆がリズム感を生み、自然な流れが美しい。（大雲評）

◆穏やかな作風で、自然な流れを上手に表現する。細やかな部分にも注意をはらい心温まる見事な作。（藤扇評）

◆爽やかな作風と料紙がよくマッチし美しい作品に仕上がった。筆がよく動き、伸びやかな線が心地よい。（仙草評）

現代詩文書

（恵雅）板橋雅邦「敏典のうた」

板橋雅邦書

180×60㎝

◆紙面を切り裂く如く、大胆な運筆で躍動感ある作。やや中央に寄せた2行構成で左右の余白を生かす。（大雲評）

◆エネルギッシュな人間性の作が心に響く。日頃の作品創作に誠心誠意をもって取り組むのでは？（藤扇評）

◆力強く、躍動感のあふれる筆致で見応えある作となった。毎回新鮮な作品を生みだす取り組みに感服。（仙草評）

◆筆を奔放に走らせたように見せながら、軽快なタッチと力強さで、メリハリの利いた書美を生んでいる。（多希子評）

臨書（清月）　境野和子「本阿弥切」

境野和子臨　　35×135㎝

部分拡大

◆変化に富んだ筆法と複雑な行構成の多い古筆。多字数を一気貫通し、臨書に向う姿勢に感服。（多希子評）

◆難しい古筆を見事に書き進む姿勢に敬服する。線の変化と行の構成が相まって感動を皆に与えて下さる。（藤扇評）

◆かすかな地模様の料紙に丁寧かつ慎重に臨書。原帖の細やかなリズム、鋭敏な線質をよく捉えている。（大雲評）

◆難度の高い古筆をリズムのよい筆線でまとめ、律動的で見応えのある臨書作。（仙草評）

前衛書（白珠）　工藤史音「希」

工藤史音書　　140×60㎝

◆豪快で力量のある充実した書線。表現力豊かな作となった。下部の終筆の処理に一考を要す。（仙草評）

◆濃墨で紙面を颯爽と駆けぬける線が躍動感を生む。スピード感ある渇筆が豊かな紙面を作った。（多希子評）

◆上部のダイナミックな運筆が紙面に大きな動きを与えた印象的な作。下部がややしまらず残念。（大雲評）

◆紙面を上下に分けつつも迫力を一気に押し流し、左右に飛沫を発する構成は、心豊かな人柄では!?（藤扇評）

臨書（澄春会）　安藤麗華「顔氏家廟碑」

◆原帖に真面目に取り組んだ姿勢を買う。丁寧な運筆で着実な臨書作だが原帖の重厚さを更に追求されたい。（大雲評）

◆向勢、丸味を帯びた重厚な線条の古典。原碑の特徴を捉え、根気良く多字数に挑む姿勢は素晴らしい。（多希子評）

安藤麗華臨　　135×53㎝

◆顔法の堂々たる作。雄大で重厚な表現を見事に醸し出す。造形にやや問題もあるが、最後まで貫く。（藤扇評）

◆顔法の特徴である蚕頭燕尾の用筆運筆をよく捉えている。濃墨を使い、さらに厚みのある線がほしい。（仙草評）

創作の部（50点）
漢字―9点
かな―4点
現代―18点
篆刻―0点
前衛―19点

臨書の部（23点）
漢字―20点
かな―3点

総出品点数 73点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
もく　森田　藤谷
八街　小川　白柳
もく　青木　藤漣

「かな」
氷壑　伊澤　香雨

「現代詩」
もく　西川　藤象
大雲　長島　僊雨
麗澤　秋山　之扇
松風　西條　松雲
八戸　市川　紫泉

「前衛」
容洲　阿部　邑里
蓮紅　大友　紅蓉
青蓮　佐々木藍水
篤信　三浦　朱鳳
玉州　遠藤　和香

（臨書の部）

「漢字」
たか　浜野　永篁
翠苑　氏家　久光
紅瑤　金井みどり
玄穹　千葉　紅雪
大雲　松永　香秋

漢字研究部
（顔氏家廟碑）

選評　名越蒼竹

今月のホープ作品

茂木絢水

漢字研究部　特選　茂木絢水

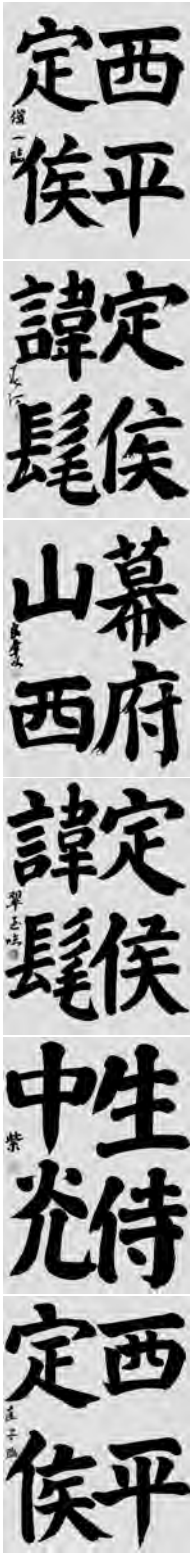
始筆の突き、横画では中程の筆の吊り上げ、縦画と右払いでは中程で筆圧をかけて終筆でもう一度穂先を立てて突くという用筆・運筆を忠実に守った臨書で、その取り組みの姿勢は他の見本であり、清々しさを感じさせる。

◎漢字研究部総評

一口に「顔法」とはいえ、楷書碑でも一碑一面貌と呼ばれるほど特徴は微妙に異なります。課題の書は建中帖や竹山連句ほど向勢と線の太さを強調してはいません。ですから手っ取り早く建中帖らしく書いてしまうと勉強にならないので注意が必要だと思います。審査では字のうまさよりも顔法としての横画・縦画、燕尾に似た波法等の用筆運筆の特徴に意を用いた作品に光を当てるべく努めました。入選と選外の差はほんのわずかです。

麗山流　まち房　千枝子　佳月子　朱星

舜侑水　芝美香　智美　翠澪　芳



俊春汀一　翠良章　紫玉　直子

桂美千彩　裕子子　敦麻　加都

かな研究部
（本阿弥切）

選評　勝山初美

今月のホープ作品

庄司咏艸

かな研究部総評

墨継ぎの太く重厚な線から渇筆部への自然な運筆が、美しく調和して深みのある作品となっている。本阿弥切用の料紙を用いるのもよいでしょう。

◎かな研究部総評

字形はよく原帖を捉えていたが、墨色が薄く変化に乏しい作品が目立ちました。丁寧に原帖を観察し線の太細・リズムに注意し更なる鍛錬を！

裕幹和
子生子

光春道
子汀子

佳典絢
恵子水

星玉愛
子枝石

かな研究部成績表

特選

書游清月る和る月琴宗秀紅大垪うる雲原游書春会か華か海川海阪
庄司咏艸安飯境三原椎茂苗原松石桜長菊天松蘭桜風草菊高東大玉大A高高
澄蘭誠有千菊紅
春鼎和秋葉月瑤
植田川市崎石石石新藍澤
サチ甘洋晴恵白珠
紅雨子雨子洞子珠
矢島堀青磯堀榎梅後高川島中青松苗原茂椎原三安飯境庄司
口山切木貝江田山藤橋崎　里木丸代澤木名島浦藤高野司
高崎向雲松雲Ｉ井真葵草鼎月琢村習草月苑畝瑤和る月游
登芝幸葵清幸和久良美優悦墨玉愛佳典絢光春道裕幹和生子
江香雲郷耀泉子泉好子子子枝石惠子水子汀子子子生子

佳作（60音順）

澄春
梅木山華
宇田川
梅田栄峯
楓会春書
澄苑游書原
たか
澄春
樹高蘭大樹書澄楓たか
原崎鼎雲る雲原游書春会か
〃高原
大樹葛小小小梅梅宇
うる合　野野寺川田木田川
木河寺加輝峯子山華
草木板橋さら
眞順和恵美
Ａ竜八大英潮
Ｉ泉生拙峰音
〃上泉
樹たみ海
桜蘭中千蓮上前
草鼎川葉紅泉橋
高陵
山森三松本本別早浜根中中中寺高篠佐斉齋紺近小小
田　田重田多府坂野岸村尾江原橋田藤藤藤野藤峰美
久とシ恵よみ恵雅美陽早杏遊淑加子ら
美永ゲ子子子子泉子子苗邑山子子
子直蒼翠美和信梅
子舟景雪枝子艸
会木勇介

入選（60音順）

大水Ａ海阪
誠和
竜泉Ｉ
〃川
中正華
もく
大青雲葉
東向島
広津
琇韻蓮
若工藤野
大石木
白附中
たか
東久総賀
澄春
八街
華祥
堺街
岩沼
正千華葉
洞書翠
椿翠
正大雲華
大友翼華
春汀
たか翠
白鷺
明正漢華
玄漢穹
蕙梅桃
四枝翠
椿鷺
上土気
上
玉白露
青蓮
澄音
もたか
立精
翠柳
玉松
琇韻
澄春
上泉
文筆
さつ
光游水彩
明漢
蓮紅
椿翠
墨宣
長月
〃春
澄橋
上泉
琇韻
正華
はせ
玉松
白露
青蓮
澄音
もたか
立精
翠柳
玉松
琇韻
澄春
上泉
文筆
さつ
光游水彩
青真
明石
浅川
荒川
みな
裕泉
吉田千鶴子
遊佐
眞紅雅
安嶋砂子
真庭タ
増田ケ
増田ミ
佳子
深澤
春山
早部
林美喜奈
林美久子
長谷子
長谷子
野川久峰
沼美子
浪奎子
戸秋藤花
樋泉風
千雪
近田
田池
柳香
竹内美智子
高幸苑
高草木子
鈴木利子
杉田祥風
嶋与
柴祢子
猿渡洋
佐々木子
鷲右
後山藤
小西沼
高武藤
工藤野
菅本
川南
加納
順汀
朱星
萩光
岡部
岡野
大島
鵜澤
入谷
今村
伊藤
飯泉
天羽多
恵子
裕泉
睦心
節子
昌子
翠子
光華
瑞葉
内外
美子
徳子
佐々木
芳子
千子
龍貞
里美
知子
樋美
知友
翠子
江香
つか
舞夢
松春
美秀
萩紅
江代
晃美
豊紫
香蘭
北登
志子
谷藤
柳
熊谷
工藤
菊地
神田
金岡
加藤
加藤
乙幡
小澤
尾和
岡紅
大田紀
大一
大友
四峰
大島
大木
大歩佳
梅津
薄田
春絲
岩祥
岩祥
井上
板垣
石渡
石田
石崎
石川
飯田
安知
藤津
楊彩
藤美
風子
慶子
昌子
翠光
節子
睦心
京子
誠貴
澄和
墨春
富原
光漢
蕙香
高彩
崎書
春蘭
澄泉
芳ま
蒼韻
京原
蒼橋
〃陽
大阪
た泉
竜呉
文筆
詢扇
祥紫
伏筆
千華
白扇
大阪
こか
華祥
白鷺
明漢
玄穹
蕙書
梅桃
四枝
椿翠
〃鷺
大阪
たか
東久総
澄賀
八街
堺街
岩沼
正華
千葉
洞書
椿翠
春原
木木
菅原
新谷
新行内
代田
瑞
島野葉
笹野美
佐々木美
櫻田
坂本
酒井
齋藤
斉藤
齋藤か
齋藤
近藤
込山
小林
小萩
小晃
小代
呉美
熊谷
工藤
北登
志子
谷本
柳
菊地
神田
金岡
加藤
加藤
乙幡
小澤
尾和
岡紅
大田紀
大一
大友
四峰
大島
大木
大歩佳
梅津
三佳
薄田
春絲
岩祥
岩祥
井上
板垣
石渡
石田
石崎
石川
飯田
知
安藤
楊彩
安美代風
春原
慶子
睦心
節子
昌子
翠光
瑞華
葉美
徳子
佐々木
芳子
千子
龍貞
里美
知子
樋美
翠子
江香
つか
舞夢
松春
美秀
萩紅
江代
晃美
豊紫
香蘭
北登
志子
谷本
柳
熊谷
工藤
菊地
神田
金岡
加藤
加藤
乙幡
小澤
尾和
岡紅
大田紀
大一
大友
四峰
大島
大木
大歩佳
梅津
三佳
薄田
春絲
岩祥
岩祥
井上
板垣
石渡
石田
石崎
石川
飯田
知
安藤
楊彩
安美代風
京子
昌子
誠貴
澄和
墨春
富原
光漢
蕙香
高彩
崎書
春蘭
澄泉
芳ま
蒼韻
京原
蒼橋
〃陽
大阪
た泉
竜呉
文筆
詢扇
祥紫
伏筆
千華
白扇
大阪
こか
華祥
白鷺
明漢
玄穹
蕙書
梅桃
四枝
椿翠
〃鷺
大阪
たか
東久総
澄賀
八街
堺街
岩沼
正華
千葉
洞書
椿翠
白露

選外68名氏名略

こだ
京子
昌子
誠貴
澄和
墨春
富原
光漢
蕙香
高彩
崎書
春蘭
澄泉
芳ま
蒼韻
京原
蒼橋
〃陽
大阪
た泉
竜呉
文筆
詢扇
祥紫
伏筆
千華
白扇
大阪
こか
華祥
白鷺
明漢
玄穹
蕙書
梅桃
四枝
椿翠
〃鷺
大阪
たか
東久総
澄賀
八街
堺街
岩沼
正華
千葉
洞書
椿翠
白露
春原
慶子
睦心
節子
昌子
翠光
瑞華
葉美
徳子
佐々木
芳子
千子
龍貞
里美
知子
樋美
翠子
江香
つか
舞夢
松春
美秀
萩紅
江代
晃美
豊紫
香蘭
北登
志子
谷本
柳
熊谷
工藤
菊地
神田
金岡
加藤
加藤
乙幡
小澤
尾和
岡紅
大田紀
大一
大友
四峰
大島
大木
大歩佳
梅津
三佳
薄田
春絲
岩祥
岩祥
井上
板垣
石渡
石田
石崎
石川
飯田
知
安藤
楊彩
安美代風
京子
昌子
誠貴
澄和
墨春
富原
光漢
蕙香
高彩
崎書
春蘭
澄泉
芳ま
蒼韻
京原
蒼橋
〃陽
大阪
た泉
竜呉
文筆
詢扇
祥紫
伏筆
千華
白扇
大阪
こか
華祥
白鷺
明漢
玄穹
蕙書
梅桃
四枝
椿翠
〃鷺
大阪
たか
東久総
澄賀
八街
堺街
岩沼
正華
千葉
洞書
椿翠
白露